

『書譜』の注釈3：書の本質と価値について（後半）と節筆・節筆様の存在

著者	廣? 裕之
著者（英）	HIROSE Hiroyuki
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	9
ページ	78-66
発行年	2020-10-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001345/

『書譜』の注釈3

―書の本質と価値について（後半）と節筆・節筆様の存在―

Annotation to Shofu 3:

The Latter Half on the Essence and Value of Calligraphy,
and Existence of Seppitsu and Seppitsu-yo

廣瀬裕之*

HIROSE Hiroyuki

はじめに

本稿は、次の二つの論文を承けるものである。

①『武蔵野教育学論集』第二号所収の拙稿「『書譜』の注釈1」

2017

②『武蔵野教育学論集』第五号所収の拙稿「『書譜』の注釈2」

2018

全訳については、すでに藤原楚水・田邊古邨・西林昭一氏など先達の優れた先行研究がある。西林氏の『書譜』解題によると、六篇に分け各篇の主旨を次のように記している。

「第一篇 王羲之を典型とする四賢の優劣論、第二篇 書の本質と価値、第三篇 六朝時代の書論、第四篇 執使用転の説お

よび王書の価値、第五篇 書表現の基盤と段階、第六篇 書の
妙境と批判、跋 語 「書譜」著作の趣旨」

本稿「『書譜』の注釈3」は、右の一覧の第二篇の後半【卷子本に揮毫された第6紙の本文1行目は全字「見せ消ち」のため、その2行目である本文85行目冒頭から第9紙8行目第3字まで】を注釈したものである。本稿は、台北の故宮博物院蔵の墨書本（卷子本）を揮毫制作するために用いられた紙面ごと、つまり孫過庭自身が揮毫した紙面ごとに、章立てしている。本稿は第二篇後半について先賢の先行研究を参照しつつ、更に判りやすい口語訳に努め、高等学校校芸術科書道の書論の単元の授業で扱うためのポイント（要点等）

を各紙冒頭に記した。また、第二篇後半に特に多出する書譜の筆法として有名な「節筆」について、その筆法で書かれた文字についても熟視し考察を加えてみた。先賢の指摘する紙の折り罫等による微妙な段差により、筆線が節状になる「節筆（▼）」（図版2・3）と、そうではなく、折り目等のない、もともと平らな紙面上においても孫過庭自身の筆遣いによって「節筆と類似する筆法（断筆を含む）」があることが判った。そこで、後者をここでは「節筆様（◆）」（図版4）と称し、前者と区別して記すこととした。

第6紙

本稿は、拙稿「『書譜』の注釈2」で記した「書の本質と価値について1（前半部）」に引き続き、後半部（第6紙から）に注釈を加えたものである。

第6紙の本文中でキーワードとなる語を次に記す。

（●ポイント1）**東晋**
とうしん

王羲之・王献之が活躍した時代。瑯琊王・司馬睿が建てた国。都は建康（今の南京）。西暦三一七～四二〇

（●ポイント2）**陶淬**
たうさい

西林氏によると「「淬・染」の草体は区別がないとし、智永真草千字文の楷書は染に充てている」という。藤原も「淬は染に同じ。感化薰染すること」とする。陶は、陶冶すること。淬は、刀剣を鍛錬するときに焼いてはたたき、たたいては水に入れることを指す。陶淬は深く感化することを指す。

◀図版1・陶淬

陶 淬

（●ポイント3）**王謝郗庾**
わうしやちゆ

王・謝・郗・庾とは、東晋時代の名族で能書家を輩出した家である。

（●ポイント4）**分布**
ぶんぷ

ここでいう「分布」とは、「分間布白」の略。分は分割。布は布置。

（●ポイント5）**好んで偏固に溺れ、自ら通規を闕す**
とくび

偏固はかたくなな事。古邨は、通規を「コンパスで円を描く時、線の動きの無理のないこと」と解き、「偏固な思想のために自ら不自由になり、藝の発展が困難なることをいふ」とする。よいところを取らず、悪い癖のみを学ぶことを言う。

（●ポイント6）**心手會歸**
くわいき

「心手の會歸」とは、こちらの動くように手が動くこと。会歸とはぴったり一つになる事。藤原は、「精神と技巧の一致。いわゆる心が手を知らず、手が心を知らず動くという三昧の心境」をいうとしている。

◀図版2・節筆の見られる行

偏 固 自 足

図版3・節筆



図版4・節筆様



《第二篇・後半》

行数

《第6紙》

- 84【情不^レ乍^レ剛柔^レ以^レ合^レ禮^レ或^レ旁^レ】
 85而東晉士人。互相陶淬。至於
 86王謝之族。郗庾之倫。縱不盡
 87其神奇。咸亦挹其風味。去
 88之滋【資】永。斯道逾微。方復聞
 89疑稱疑。得末行末。古今阻絕。
 90無所質問。設有所會。緘秘
 91已深。遂令學者茫然。莫知
 92領要。徒見成功之美。不悟
 93所致之由。或乃就分布於
 94累年。向規矩而猶遠。圖
 95真不悟。習草將迷。假令

▼1 ▼1 ▼1 ▼6 ▼4

◆1

◆2

「一」は、見せ消ち

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

- 96薄^レ解^レ草書。粗^レ傳^レ隸法。
 97則^レ好^レ溺^レ偏^レ固。自^レ閼^レ通^レ規
 98詎^レ知^レ心^レ手^レ會^レ歸。若^レ同^レ源^レ而
 99異^レ派。轉^レ用^レ之^レ術。猶^レ共^レ樹^レ而

▼5 ▼9 ▼9 ▼7

《第7紙》

100分條者乎。

「訓読・訳」

①而^{しかう}して東晉の士人、互^{たがひ}に相ひ陶淬^{たうさい}す。王・謝の族。郗^ち・庾^ゆの倫^{ともがら}に至りては、縦^{たな}へ其の神奇に盡^{つく}さざるも、咸^みな亦^{また}其の風味を挹^くめり。

・しかるに東晋時代の学問修養を積んだ人は、お互いに陶淬（深く感化）しあっている。王・謝の一族や、郗・庾の一門に至っては（特に優れていて）、たとえ神のように優れた境地とはいえないまでも、みな、その風趣を持ち合わせていた。

東晋Ⅱ〔●ポイント1〕参照

陶淬すⅡ〔●ポイント2〕参照

王・謝の族。郗・庾の倫Ⅱ〔●ポイント3〕参照、

郗は「周の村里の地名・姓氏」として用いられた漢字。庾は「こめぐら・こめのますめ」の意の漢字である。

縦（たと）へⅡたとえ・・・であっても、かりに・・・としても

咸（みな）Ⅱことごとく・あまねしの意。

挹Ⅱくむ。すいあげること。

②之を去ること滋ます永くし、斯の道逾いよ微へる。方に復た疑しきを聞き、疑しきを稱し、末を得ては末を行なひ、古今阻絶して、質し問ふ所無し。設し會する所有るも、緘秘已に深く、遂に學者をして茫然とし、領要を知ること莫く、徒に成功の美を見て、之を致す所の由を悟らざら令む。

・(しかし) このような時代が過ぎることがずっと長くなると、書の道は、ますます衰微してきた。そうなってくると疑わしい説を聞き、疑わしきままに唱え、抹節(つまらないこと)に得心して、末節的な事(枝葉末節)ばかり行うようになったため、古今の(過去と現在)の脈は断絶して、正しいことを得るためには誰に質問していいのかわからなくなった。たとえ、(書に精通した人に) 出会うことがあつたとしても閉じられて秘密の部分が深く、(人には教えない)。書を学ぶものは茫然として要領(大事なこと)を得ることができず、ただ単に出来上がったものの美しさを目にするだけで、その生み出された理由は悟ることができなくなってしまったのである。

滋(ますます) 〓「いよいよ」の意。ほかに「ます(増える・多い)」
逾(いよいよ) 〓ますます

微へる 〓「衰える」の意。いやしい・かすか・ほのか

末 〓末節・つまらないこと

古今阻絶 〓過去現在の断絶

質(ただ) し 〓ただす (正) の意

設し 〓たとえ・仮定

會ふ 〓出会う。集る。

緘秘 〓閉じて秘密にする

領要 〓要領のこと

③或ひは乃ち分布を累年に就すも、規矩に向かひて猶ほ遠く、眞を圖き悟らず、草を習ひて將に迷はわんとす。

・もしくは書の分間布白(構成や配置)について年を重ねて研究しても法則を理解するのにまだ遠く(はるかに奥深いため)、楷書を書いてみても悟ることができず、草書を習ってみても迷いを抱くばかりである。

分布 〓(●ポイント4) 参照

累年 〓年を重ねる

眞 〓真書とは楷書のこと

圖 〓「はかる(計)・えがく(画)」の意があるがここでは、「書く」の意として用いている

④假令薄か草書を解し、粗ば隸法を傳ふるも則ち好んで偏固に溺れ、自ら通規を閑す。詎ぞ知らんや。心手の會歸は、源を同じとして派を異とするが若く、轉用の術、猶ほ樹を共にして《條を分つ者なるをや。》

・かりにいささかは草書について理解し、あらまし楷書の書法を伝承し得たと思つていても、それは偏つて固まつている(我流にはまり込んでいる)だけで、自分から通規(普遍的なことを学ぶこと)をさまたげていることとなっている。(つまり、よいところを取らず、悪い癖のみを学んでいることを嘆いている。)

どうして知ろうや。「心手の会帰(精神と技法がぴったりと一致しているということ)」は、水源を同じとし支流が分かれて

いるようなもので、「転用の術(用筆法)」が、あたかも同じ幹に分派して生え出る小枝のようなものであるということを、どうしてわきまえる(理解する)ことができるか。「名筆家は書風や技法を異としても会得している境地・用筆の根幹は一つであり同じ源なのである。」

假令(たとひ) 〓 もしも・よしや・かりに狎

薄 〓 いささか・うすい

粗 〓 「ほぼ」は略と同訓として用いられる。あらましの意。

隸法 〓 ここでは楷書のこと

偏固 〓 偏つてかたまる

通規 〓 普遍的なこと

闊す(とざす) 〓 ふさぐ・さまたげる

詎(なん)ぞ 〓 いずくんぞ、なんすれぞ

心手の會歸 〓 (●ポイント6) 参照

轉用之術 〓 用筆法のこと

第7紙

第7紙の本文中でキーワードとなる語を次に記す。

(●ポイント7) 趨吏・適時

釈文解釈に①「趨吏・適時」(古邨・西林)、②「趨變・適時」(台北故宫博物院解説・藤原)の二説ある。

①の「趨」は「向かう」の意であり、「役人が仕事に向かうときに適うのは」。

②の「趨」はもう一つの意の「はやく」として用いられ、「変」は「うごく・動かす」の意がある事から、「はやく動

かす時に適うのは」の意。どちらも意味的には問題ない。肉筆から過眼すると、●印の漢字は、書者によって後から上書訂正された痕跡があるが、その筆跡から明らかに「吏」に見える。

◀図版5・趨吏・適時

趨吏・適時

◀図版6

●吏の草書

●變の草書

吏之義王
文彭

(●ポイント8) 行書為要

釈文解釈に①「行書為要」・②「行書為要」の二説ある。「要」には、おだやか・やすらかにする・順当の意味がある。「要」には、かなめ・しめくくり・物事を締めくくる大切なところの意がある。

①は「行書は妥当となる。」②は「行書が要である。」という意となる。西林氏は「百川学海本ほかほとんど「要」字と釈くが、他の個所の要の字と差があり、また第二画目が要の諸種の草体と異なるため、田辺万平氏の釈にしたがう」と記す。本稿でもこの①の説にしたがった。西林氏によると「行書」という語は『四体書勢』

(●ポイント11参照)に初見するという。【注1】

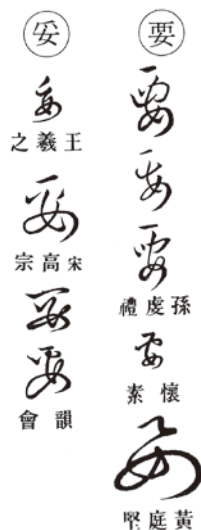
◀図版7・行書為要

行書為要

●図版8〔注2〕

●要の草書

●妥の草書



「図版8」(要)の草書として字書に掲載されている上から二字目の字例に注目していただきたい。この草書字典の編者は従来の説に従い「要」に挿入しているが、もし「妥」とよむのが正しいとするとこの草書の字例は「妥」の中となるろう。ゆえに、この字例は要注意の草書体といえよう。

●ポイント9 題勒方畧

「題」は題字・題額のこと。「勒」は「勒銘」のことであり、銘文を金属や石に彫り付けるまた、彫り付けられた銘文のことを指す。「方畧」とは、揭示して見せる大字のこと。

●ポイント10 使転

使転について、①藤原は「草書の曲線や楷書の転筆のところの曲がりかど」、②古邨は「草書における引廻し、即ちうねうねである。したがって曲線的なもの」、③西林は、「曲線的な要素をなすべきリズム」とする。「使転」についていろいろな解釈があるが、これらを基に総合的にみると、「曲線的な運動のリズム」といえるよう。

この紙面に四回出てくる。

- 1、使轉為情性
- 2、使轉為形質
- 3、草乖使轉
- 4、使轉縱横

●ポイント11 隸奇

ここである隸は、楷書のこと。今日、隸書というと、古隸と八分のことを指すが、かつて、西晋時代に衛恒によって著された書論『四体書勢』を見ると、この中で書体は、「古文・篆書・隸書・草書」の四つに分けられ、この隸書の中に「八分・楷書・行書」が含まれていた時代があった。奇は、「めずらしいふうでないもの」とりわけすぐれたもの」。元常(鍾繇)の「楷書が絶妙なこと」を指す。「隸絶」ともいう。

行数

《第7紙》

- 100 (分條者乎。) 加以趨吏(變) 適時。
 101 行書為妥(要) 題勒方畧。眞乃
 102 居先。草不兼眞。殆於專謹。
 103 眞不通草。殊非翰札。眞以點
 104 畫為形質。使轉為情性。草
 105 以點畫為情性。使轉為形質。
 106 草乖使轉。不能成字。眞虧點
 107 畫。猶可記文。迴互雖殊。大體
 108 相涉。故亦旁通二篆。俯貫
 109 八分。包括篇章。涵泳飛白。若
 110 豪釐不察。則胡越殊風者
 111 焉。至如鍾繇隸奇。張芝草
 112 聖。此乃專精一體。以致絕倫。
 113 伯英不眞。而點畫狼籍。元

★釋文異說あり

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

性情Ⅱ筆者の気持ちの動き

⑦ 廻互殊なりと雖も、大體相ひ渉る。故に亦た二篆に旁通し、八分を俯貫し、篇章を包括、飛白を涵泳せよ。若し豪釐察せずんば、則ち胡・越の風を殊にす者あらん。

趨(おもむ)くⅡ向かう

翰札^ニかんさつ・手紙・簡札・筆札。翰には「羽・筆・ふみ」の意がある。古代

には鳥の花で筆を作った。

楷書は「一点一画を「字形の本質」とし、一曲線的な運動のリズム」を「筆者の気持ちの動き」とする。草書は、点画を「筆者の気持ちの動き」とし、「曲線的な運動のリズム」を「字形の

「本質」とする。草書は、「曲線的な運動のリズム」の動きを誤って離れると、文字として読めない。楷書は、点画を（一つ二つ誤って）欠いて（しまったとして）も文字として読める。

形質Ⅱ字形の本質

⑦ 廻くわい互ご殊ことなりと雖も、大體相ひ渉わたる。故に亦た二篆に旁通ばうつうし、八分を俯貫はふくわんし、篇章を包括はうくわくし、飛白を涵泳はんえいせよ。若し豪釐察さつせずんば、則ち胡・越の風を殊にす者あらん。

(ゆえに楷書と草書は、形質と性情の) 相関関係は相反する。雖も、おおむね相互に関係している。だから同様に二つの篆書体(大篆・小篆)にあまねく精通し、はつぶん八分(隸書)を俯首(下を向いてじっくり見る)し、章草を包括(ひとまとめに)し、飛白に沈潜(しっかり沈み潜るほど学ぶ)というようにこれらを合わせて研鑽しなくてはならない。)

もしこれらの研鑽をしたとしても（浅く）行き届かない（しつかりと学習できていない）ところがあれば、胡と越の（遠く離れた場所の異なった）風俗習慣のように、《書の本質から》遠く隔たってしまうだろう。

迴互 Ⅱ 相關關係

旁通 Ⅱ 遍く届く。 広く尽くす。

俯貫＝俯は「下を向く。」下を向いて紙背に貫くようにじつくり見る。

篇章＝ここでは、章草の意。西林は、「一般には篇籍文章の意で用いる」という。

涵泳⇨涵は、水にひたす・うるおう・いれる。

豪釐Ⅱ釐は、理・みちすじ

胡・越の風＝胡は北方の異民族のこと。越は南方の異民族のことであり、風は、風俗のこと。互いに遠く隔たっていること。

⑧鍾繇の隸奇、張芝の草聖なるが如きに至りては、此れ乃ち專精一體にして、以て絶倫を致せる。伯英は眞ならざるして點畫は狼籍たり。元常は草ならざるも使轉は縦横たり。茲れより己降、兼ね善くすること能わざるは、逮ざる所有り。專精なるに非ざるなり。

篆・隸・草・章・工用多変なりと雖も（第8紙へ）

・鍾繇の隸奇（楷書が絶妙なこと）、張芝の草聖（草書が絶妙なこと）なるが如きは、これこそ誠心誠意努力研鑽したことによつて絶倫（この上もなく素晴らしい境地）に達したものである。

張芝といえは楷書（が有名）ではない（草書が有名である）が、けれども、（楷書の）点画（の要素）は狼籍（みだれ入っている。つまり、楷書の要素が随所にみられること）である。

鍾繇は、草書が有名ではなく（楷書が有名である）けれども使轉（曲線的な運筆リズム）が縦横（自在）に駆使されている。

これより（鍾繇と張芝）以後、両方ともよくすることができないのは、才能が及ばないからであり、もっぱら專精（専門を一筋に励む）していないからである。【篆書・隸書・草書・章草

の体は、・工用多変なりと雖も（第8紙へ）】

隸奇＝（●ポイント11）参照

絶倫＝このうえもなく素晴らしいこと。

伯英＝張芝のこと

元常＝鍾繇のこと

狼籍＝みだれ入る・とりちらかすの意

縦横＝縦横と同じ。「自在に」の意

專精＝もっぱら・一筋

第8紙

第8紙の本文中でキーワードとなる語を次に記す。

（●ポイント12）濟成厥美（厥の美を濟成す）

「厥の」は、「其の」と同じ意味である。「濟」は「さい」と読む（呉音）と、「わたる・すむ・なす・すくう」。「せい」と読む（漢音）と、「おごそかでうやうやしい・中国の地名など」となる。ここでは、前者であり、「さい」と読み、「なす」つまり「事を成し遂げる」の意である。「濟美」という語にも成し遂げるの意があり、「濟成」も同意と考える。

（●ポイント13）精而密（精にして密）

「精にして密」とは、精細・精緻。つまり精密のこと。こまかくくわしい。精には、こころ・たましい・もと・本来の力・詳しいの意がある。

（●ポイント14）風神

藤原は、字の風韻をいうと解き、「『續書譜』によると、一には人品高るべく、二には師法古なるべく、三には筆紙佳なるべく、・字の気韻は、人品と関するところ尤も大なるを知らねばならない」を引く。

（●ポイント15）驗燥濕之殊節。千古依然。

（燥濕の節を殊にするを

驗すれば、千古依然たり）

【一】は、見せ消ち

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

〔ポイント16〕 體老壯之異時。百齡俄頃。（老壯の時を異にするをらうさう）
體すれば、百齡は俄頃なり。）

〔●ポイント17〕有乖有合（くわいあがふ乖有り合有り）

調子の悪い時があり、調子の良い時がある。

〔●ポイント18〕 感恵^{かんけい} 徇^{じゆん}知^ちなる

藤原は「恵に感じ、知に洵う」と読み、「物に感ずるも恵に感ずるも大要意味にちがいはない。知に洵うは、知己の感といふことであらう。」とし、西林は「感恵く洵知なる」とよみ、感恵は、用例の见ない語であるが、洵知は、『史記』趙世家に「聡明洵智」の語があることから、「遍く知る」意であらうから、松井如流先生の「書の構想がすぐに浮かんでくるような、つまり、血のめぐりの良い状態」の意としている。

「恵」は「さとい」と読むと、「賢い、物分りが早い」の意となる。

〔一〕は、見せ消ち

- 70 -

書は精細で緻密さが大切であり、草書は流麗にして伸びやかなことが大切であり、章草は、調べたり考えたりするときに簡略化した便利さを務めている（役割としている）。

そのうえで、これらに凜とした厳しさをもたせるのには風韻をもつてし、おだやかさをもたせるには、なまめかしい潤いをもつて、躍動させるのには強い力を底に持つて、ほどよく調和させるのには、しずかでゆつたりとした品格を持たせることである。

済成厥美Ⅱ〔●ポイント12〕参照

宜しき攸Ⅱ「よろしきところ」は、理にかなったところ。攸は、ところ（所）と

同じ意。

婉Ⅱえん・したがう・すなお・しとやか・うつくしいの意があり、曲がりくねつ

て美しいこと。

通Ⅱ心を通わせる意

精而密Ⅱ〔●ポイント13〕参照

凜Ⅱ寒い・りりしいの意あり。ここでは後者。

風神Ⅱ〔●ポイント14〕参照

妍潤（けんじゅん）Ⅱ美しくなまめかしい潤い

檢にしてⅡ封印・調べる・締めくくる・ただす・のり・手本・おこない・かんがえる・ためき（木の曲がったのを直す道具）の意味がある。ここで

は「調べたり考えたりする」意。

便Ⅱここでは、簡略化した便利さの意

鼓するⅡ奮い起こす。ここでは躍動する意。

枯勁Ⅱ古勁のこと。力強いこと

閑雅Ⅱしずかで優雅

⑩故に其の情性に達して、其の哀樂を形にすべし。燥濕さうしつの節せうを殊ことにするを驗けんすれば、千古依然らうきやうたり。老壯らうさうの時を異にするを體たいすれば、百齡ひやくれいは俄頃げいなり。嗟乎ああ、其の門に入らずんば詎いずくんぞ其の奥を窺うかがわんや。

・そうして、そのところに到達し、その（喜怒）哀樂を形として表現するべきである。陽炎や雨露の季節が交互に常に異なりながら（一年のうちに）進む兆候は、千年にわたっても依然同じである。若者から年寄りとなるまでの時間変化を体験すれば、百歳までの時間は、あつという間である（ことに気づくであろう）。ああ、書の門をたたくことがなかったならば、けつして人生の深い境地をうかがい知ることができなかつたであろう。

情性Ⅱ本性「苟・性惡」。人情と性質。こころ。

驗燥濕之殊節。千古依然Ⅱ〔●ポイント15〕参照

體老壯之異時。百齡俄頃Ⅱ〔●ポイント16〕参照

老壯Ⅱ年寄りと若者。

⑪又また一時にして書するも乖くわい有あり合が有ふり。合がするは則くわいち流媚りゅうび、乖くわいするは則くわいち雕疎りょうそ。略はぼ其の由を言おのわんに、各の其れ五あり。神怡よろこび務閑なるは、一合也。感恵けいし洵知なるは二合也。時和氣潤は三合也。紙墨相發なるは四合也。偶然欲書は五合也。

・また、同じ時に書いたとしても調子の悪い時と、調子のいい時がある。調子のいい時は、筆の調子流れるように動かし、調子が悪い時は筆の動きがしばみ滞る。その理由を簡単に述べると、おのおの次の五つある。精神が和らいで仕事が進むとき

は、第一の合である。感性に恵まれ徇知（血の巡りが良い）するときに第二の合である。氣候が穏やかで潤いのある時が第三の号である。紙と墨がよくなじむときに、第四の合である。ふと書を書いてみたくなった時が第五の合である。

一時＝一時は時間ではなく、「同一の時」「同じ時」と訳したい。

有垂有合＝（●ポイント17）参照

流媚＝筆の調子が流れるように動くこと

雕疎＝凋落の凋と同じで「しほむ」意。雕疎は、「心がしほむこと。」

神怡び＝怡は、悦と同意。

感惠徇知＝（●ポイント18）参照

第9紙

第9紙は3行で用紙が切れて見えるが、これは経年による損傷とみてここでは、次紙も第9紙として扱う。ここでは、前紙と意味上で切れる第8紙最末尾の行から、第9紙中で、書譜の内容分類の中で第二篇が終了する8行目までを扱うこととする。

（●ポイント19）情怠手闌（情怠り手闌る）

気分が進まず手が思うように動かないとき。「闌」は、「ですり、欄干・たけなわ・遮る・ふせぐ・へだてる・邪魔をする」の意があるが、藤原は「だるき」、田辺は「らんなるは」、西林は「とどまる」と読む。

（●ポイント20）思遏手蒙（思ひ遏め手蒙ふ）

思いがとどまり手がふさがり覆われる（手が思うように動かない）こと。「遏」は「アツ・とどむ・やめる・さしとめる」の意。

「蒙」は「くらいい・年が若い・こうむる・おおう・おいにかくす・こうむる・あざむく」など意味が多い。

「一」は、見せ消し

行数

▼節筆、◆節筆様のある文字とその字数

132 《第8紙末尾》・・・心遽體

《第9紙》

133 留一乖也。意違勢屈二乖也。

134 風燥日炎三乖也。紙墨不無

135 稱四乖也。情怠手闌五乖

136 也。乖合之際。優劣互差。得

137 時不如得器。得器不如得志。若五乖

138 同萃。思遏手蒙。五合交

139 臻。神融筆暢。暢無不適。蒙

140 無所從。

「第二編はここまで」

「訓読・訳」

⑫ 心遽しく體留むは一乖也。意違ひ勢屈すは二乖也。風燥き日炎ゆ

は三乖也。紙墨稱はざるは四乖也。情怠り手闌るは五乖也。乖合

の際、優劣互に差ふ。時を得るは器を得るに如かず。器を得る

は志を得るに如かず。若し五乖同に萃れば、思ひ遏め手蒙ふ。五

合交も臻れば。神融し筆暢ぶ。暢ぶれば適せざる無く。蒙なれば

從ふ所無し。

・心があわただしく体がだるい時は、第一の乖である。気持ち乗らず氣勢が屈するときは第二の乖である。氣候が乾燥し炎天の時は第三の乖である。紙と墨がなじまない時は第四の乖であ

る。書こうとする意欲が起こらず手が重いと感ずるときは第五の乖である。調子のよい時、調子の悪い時によって作品の出来具合に優劣の差ができる。良い時期を得る（待つ）ことよりも良い器（道具）をそろえた方がいいし、良い道具をそろえるよりも志（気持ちの充実）をはかることの方が大切である。

もし、五つの乖が同時に集まったら、書こうという思いがしなぐなり手がふさがり覆われる（手が動かなくなる）が、五つの合がともに揃えば、心がゆつたりとして、筆の調子ものびやかになる。筆が暢達すれば思いのままになるが、覆い隠されれば（筆が滞れば）どうしようもない。

炎（も） ゆゑ熱い、激しいさま

稱（かな） ふゝ適する。つりあう。

闊（だる） きゝ（●ポイント19） 参照

萃（スイ） あつまる・むらがる・あつめる・やつれる

思過手蒙（●ポイント20） 参照

節筆・節筆様の定義について

節筆とは「書中字画に節勢ある運筆をいう。大正の末年、書譜の墨蹟本の写真がわが国に紹介され研究者を驚喜せしめたが、昭和四年、松本芳翠は「書譜の節筆について」の論攷を発表して話題を呼んだ。これは書譜の中に散見する字画の筆勢が料紙の折目に起因するものであることを明らかにしたものである。（伊藤峻嶺）」【注3】と記されている。

今、節筆の定義をするにあたり、右の文章から改めて考えてみると、

①「書中字画に節勢ある運筆をいう」

②「書譜の中に散見する字画の筆勢が料紙の折目に起因するもの」という二種類の内容が記されている。

今日一般的には『書譜』中の折り目に起因するものを「節筆」という。つまり②である。「節」とは一般に植物の幹や茎にあつて盛り上がった、ふくれ上がったたりしている部分、つまり物の盛り上がったたり瘤のようになつたりして区切り目にもなっている部分のことをいう。また、「節」には、物を隔てるもの。区別するもの。区切るもの。という意味もあることから、①の「節勢」という語は「盛り上がったり瘤のようになつてゐる所」と「隔て区切られてゐる所」つまり断筆のようになつてゐる所の意も含むこととなる。

今回の過眼で、折り目等がなかつたと推定できるところに節勢のある運筆をかなり見つけたので、節筆の定義についてあいまいな部分を整理する必要があると考えた次第である。そこで、本稿では右の②を「節筆」と定義し、①の中でも孫過庭独自の筆遣いによる折り目に起因しない節勢ある運筆を類似していることを表す「様」を付し、「節筆様」と称して分けてみた次第である。

【注1】行書 『中国書論大系』第二卷唐1所収・西林昭一訳『書譜』解題・注136より・一四八頁

【注2】藤原楚水『芸術草書大字典』より

【注3】節筆 伊藤峻嶺解説（飯島春敬編『書道辞典』昭和50東京堂出版・四二六頁）

参考文献

- ・藤原楚水『註解名蹟碑帖大成』下巻 1977・1 省心書房
- ・中田勇次郎編『中国書論大系』第二卷唐1 1977・12 二玄社
- ・西林昭一訳『書譜』 右書に所収
- ・田邊古邨『田邊古邨全集』 芸術新聞社
- ・藤原楚水『芸術草書大字典』 1975 三省堂
- ・『日本国語大辞典』第二版第十一巻 2001・11 小学館